令和4年度　東京都立野津田高等学校　学校経営報告

校長　池　戸　成　記

1　今年度の取組みと自己評価

（1）教育活動への取組みと自己評価

①学習指導

＜目標と方策＞

○一人一台端末、ＩＣＴ及び BYOD 等を活用した学習方法の研究と実践に努め、デジタル技術を活用した教育を推進する。

○習熟度別授業の充実や少人数制授業の推進・活用により、「基礎・基本の徹底」を図るきめ細やかな指導を実践する。また、個に応じた指導の推進を図るため、補講や講習を充実させる。

○生徒の実態に即した授業形態、指導方法及び授業展開等の工夫に絶えず取組み、生徒の興味・関心を引き出すとともに、「わかる」授業を展開し、「できた実感」を体験させる。

○各教科において、生徒が見通しを持って粘り強く取組み、自らの学習活動を振り返って次につなげることができるような学びの道筋を提示し、主体的な学びの過程を実現させる。

○教科指導力向上のために、「教員相互の授業参観」を推奨し、研究と修養に努める。また、他校の模範授業の参観など、積極的に校外での研修に参加し、研鑽に努める。

○福祉：地域や福祉施設と連携した実習を基盤に、自尊感情を育成するとともに、命に対する畏敬の念と人権尊重の心を養いながら、福祉に関するスペシャリストの養成に向けた指導を徹底する。

○体育：スポーツが持つ、品位、結束、規律、尊重などの態度育成を第一義とし、自身や他者との関わり方を学ぶことによって、共生社会の実現に必要とされる人材の育成に努める。
質及び量ともに豊かな実技を中心とした授業を基盤に、技能向上のために自ら考え行動する態度を育成する。学校設定科目「専攻スポーツ」を充実させ、専攻種目における競技力の向上を図る。

＜取組みと自己評価＞

○教科単位での共通デジタル教材を活用した授業や、教育情報部主導の研修会の実施など、前向きに取り組み、授業における活用率に関しては、一定の成果が上がった。

・生徒の「学習状況調査及び生徒による授業評価」（以下「調査」）において、機械・通信などのハード面などに関する回答で最も多いのは、「どうにかこうにか取り組めた」（45～51%）である。また、中身・内容・課題などのソフト面でも「何とか取り組めた」（47～53%）と、何とかついてきている状況である。

・一学年の一人一台端末についての調査では、「パソコンでの授業の方がわかりやすい」と「パソコンを使わない方がわかりやすい」が同じ 15%、「どちらかというとわかりやすい」（36%）「どちらかというと分かりにくい」（33%）と、ほぼ半数ずつに分かれた。生徒の実態を反映させた一人一台端末の活用法について、教科ごとに更なる検証と研鑽を行い、教科間で共有することが必要である。

・一学年の一人一台端末についての調査では、「毎日持ち帰って充電している」が 22%、「たまに充電を忘れることがある」「持ち帰ることを忘れることがある」を合わせると 68%、「ほとんど持ち帰らない」が７％であった。端末の準備不足の生徒に対する指導に解決すべき課題が残る。

（評価 B）

○「高校での学習の仕方が理解できる」という質問に「あてはまる」「ややあてはまる」という肯定的回答をした生徒は 1 年生が 93%、2 年生が 83%、3 年生が 88%と若干の上昇傾向にある。また、「高校に入って得意科目ができた」という質問の肯定的回答は同 60%、65%、79%と上級生になるにつれて昨年度よりも上昇している。これらのことから、中学でつまずいた生徒たちが徐々に理解をしながら成長をしていることがうかがえる。

・学校評価アンケートでは、「授業での説明や教え方は分かりやすいように工夫されて（して）いる」という質問に対し、生徒の肯定的回答は 80~90%台（昨年度比ほぼ横ばい）であり、教員は100%が肯定的回答であった。教員と生徒の間に認識の差はあるが、基礎基本の徹底を目指す授業の成果が伺える。
・反面、「苦手科目・わからない科目はない」という調査における肯定的回答は同 14%、26%、47%であり、上級生になるに伴い増加している。内容が高度になるに従い、得手不得手が分かれていく傾向が見える。
・「生徒は、授業や学習に積極的に取り組んでいる」という質問に対し、生徒の自己評価は高いが、教員の評価は決して高くないことが分かった。生徒はもっとできると思っている教員が多い。
（評価 B）

○福祉科生徒の介護福祉士国家試験の合格率が 100%であった。大変誇らしい成果が出た。
・「福祉科の専門科目について技能や知識がより深まった」という調査では、肯定的回答は 1 年生が 100%、2 年生 92%、3 年生 83%であった。また、「日常的なボランティア活動などを通して援助者としての資質を向上させることができた」という質問に対する肯定的回答は同 94%、80%、93%であった。福祉科の教育課程の目的に対する成果が認められる。
・体育科において「専門種目について技能や知識が深まった」という質問に対する肯定的回答は同 86%、89%、90%であった。また、「専攻以外の種目について、技能や知識がより深まった」という質問では、同 100%、88%、83%であった。専攻と専攻以外の偏らない学習ができていると考えられる。
・スポーツが持つ、品位、結束、規律、尊重などの態度を育成し、社会に必要とされる人材の育成に今後も努めていく。**（評価 A）**
○「教員相互の授業参観」は取り組む教員とそうではない教員の 2 極化がみられる**（評価 C）**

②進路指導
＜目標と方策＞
○進路指導部が主体となり各学年との連携を図る。また、3 年間を見据えた系統的・体系的な進路指導計画を作成し、キャリア教育を全教職員で組織的に実施する。
○生徒個々の適性や希望を把握し、その実態に応じて適切な進路情報を提供するとともに、ハローワーク等の関係機関と連携を密にし、適切な個別相談等を実施する。
○進路ガイダンス、職業講話、企業見学、上級学校見学やインターンシップを通して、生徒が望ましい勤労観や職業観を身に付け、主体的に進路を選択決定していける能力、態度を育成する。
○「進路だより」等を使い、定期的に進路に関する情報に触れさせることによって、進路に関する意欲や意識の喚起を図る。
＜取組みと自己評価＞
○3 年間の系統的な進路指導計画の策定も 3 年目になり、形を成してきた。結果として、3 年時の進路に関する意思決定が早まり、望む進路を叶えた生徒が増加した。また、決定率も上昇した。1・2 年生用の「進路の手引き」は、その活用方法や内容を振り返り、今後さらに改訂していく。
・進路指導部と学年の間で、進路行事における主催分掌と主管分掌を整理し、責任と系統性がより明確になりつつあることによって、進路の決定率や決定時期などが好転している。**（評価 A）**
○「卒業生の話を聞く会」の実施や、校外での進路行事など、新たなイベントも継続して企画した。精査しながら、スクラップ&ビルドを行っていく
・昨年度からの取組である、1・2 年生二学期での進路希望調査実施、2 年生三学期での進路ガイダンス実施＋志望理由書作成指導、業者を活用した進学模擬面接の実施、受験体験記の作成、拡大進路部会の実施等を引き続き実施した。**（評価 A）**
○進路情報の発信にはまだ改善の余地がある。全体のキャリア計画と進路の手引きとの互換性を保ちながらの計画を立てていきたい。**（評価 B）**

③生活指導

＜目標と方策＞

○生活指導部や学年に偏重することなく、生徒との信頼関係を基盤とした全校体制の指導を行う。特に中途退学者の減少のために、きめ細やかで粘り強い生活指導を継続する。

○生徒相互や生徒と教員間の「あいさつ」を励行するとともに、身だしなみを整える指導を徹底し、基本的生活習慣を確立する。

○地域の関係諸機関と連携した交通安全、薬物乱用防止、ＳＮＳやインターネットの適正使用等のセーフティ教室や健全育成講話を実施する。

○「時間を守る」意識の育成を図り、遅刻指導に取り組む。また、全教員で「チャイムで始まり」「チャイムで終わる」授業を実践すると同時に、机上・机下の整理整頓を徹底する。

○「いじめのない学校」を実現する。いじめ対策として、いじめ対策委員会の定期的開催やスクールカウンセラーを活用した早期発見に努め、家庭との協力体制を構築し、生徒の悩みに対応する。

○地域からの声に迅速かつ丁寧に対応し、特に交通ルールの遵守と、自転車通学のマナーを向上させるための指導を徹底する。

＜取組みと自己評価＞

○「校則の遵守」についての調査で、「しっかり取り組めている」と回答した生徒は、1 年生 45%、2 年生 45%、3 年生 42%であり、「まあまあ取り組めている」と合わせると同 87%、90%、87%であった。教員の意識とさほど違いはなく、校則を守る必要性を理解し、取り組めている。

但し、アプローチし続けないと乱れていくという実態がうかがえる。

言葉遣い、礼儀に関する調査でもほぼ同様の数値が出た。

・学校評価アンケートにおいて、「頭髪や校則についての指導は納得できる」という質問に対し、生徒の 57～60%が「よくあてはまる」と回答しており、「ややあてはまる」と合わせた肯定的回答は 91～92%であり、生徒の理解と納得に基づいた粘り強い生活指導に取り組めていると考えられる。但し、否定的意見も 10%弱は存在しており、生徒による自主的なルールの制定も視野に入れつつ、本校の生活指導の基盤を維持していきたい。

・中途退学率は昨年度の 3.1%から 2.7%に減少はしたが、一昨年度の 2.5%よりは多かった。しかし、転退学に至るまでの指導や面談は担任団が組織的に粘り強く、かつ綿密に行っており、数字だけでは測れない指導が行えた。今後もより個に応じた指導の徹底を図っていく。**（評価 B）**

○挨拶は多くの生徒と教員が交わしており、成果がみられる。

・身だしなみについては、コロナ禍の対応と併せ難しい面があり、若干の乱れがみられる。組織的な対応が未成熟であった。

・自転車の事故が一時期増加した。その後の指導により大きく減少したが、立地から見て、今後の最重要課題の一つである。

・調査における「チャイム着席・授業の準備」について、生徒の肯定的回答は 80%台であり、高い水準ではあるが、生徒の自発的な行動はまだ完全ではない。しかし、しなければならないことは理解できており、自発的な行動に如何につなげられるかという段階である。**（評価 B）**

○関係諸機関と連携した交通安全や薬物乱用防止教室の他、「生涯の健康に関する理解促進事業」として、産婦人科医を招聘した授業を実施した

・全体的に、コロナ禍もあり、地域との連携が薄かった。今後も多岐にわたる内容の講義に外部と連携しながら取り組み、生活指導上の課題を克服していく。**（評価 B）**

○いじめと認知した件数は 1 件であった。残念なことではあったが、学校の妥協しない厳正な態度を示すことができた。今後も 0 件を目指し、教育の柱に据えながらも、「あり得ること」と認識し、教科横断的にあらゆる機会を通して人権意識の醸成に努め、偏見や差別をなくすと同時に、いじめ根絶に向けて組織的な教育活動を行っていく。**（評価C）**

④特別活動・部活動

＜目標と方策＞

〇専攻スポーツでは、外部指導員を積極的に活用するなど質的充実を図るとともに、各専攻が共通目線で生徒指導を行うことにより、競技力の向上と学校への帰属意識の向上を図る。

〇学科を越えた部活動の活性化に取り組み、部活動を通して学校への帰属意識や連帯感をもたせるとともに、生徒の健全育成を積極的に推進する。

〇文化系活動の表現の場を積極的に設け、生徒の表現力や意欲の向上に資する。

〇特別活動の意義を十分に理解し、野津田祭をはじめとする行事の運営を生徒が主体となって行えるよう支え、学校の活性化を図る。

〇委員会活動の充実を図ることによって、より良い学校生活を送るために生徒が主体となって活動していく機会を増やし、健全な社会性の育成に努める。

〇生徒の人権を尊重した指導や自発的な活動を保障し、体罰・暴言のない指導を徹底する。

＜取組みと自己評価＞

〇陸上部のインターハイ、国民体育大会、U18 日本選手権出場など、全国的な活躍があった。また、他の運動部においても一定の成果が見られた。

・顧問は指導の柱を部同士で共有しながら、難しい状況下でも生徒への指導を継続できた。

・部活動加入率は依然として 60%を割っており、特に運動部活動の部員増が課題である。興味・関心の対象を見つけ、深めていく活動への参加を一層促す手立てを講じていく。**（評価 B）**

〇文化部では、大会で優勝した部活動や、校内でのミニコンサートの開催、大会への出品、文化祭への出展などコロナ禍においても工夫を図り、活性化が見られた。**（評価 B）**

〇制限付きではあったが、3 年ぶりに 3 学年揃っての野津田祭を開催し、文化部門、体育部門共に生徒が主体的に行事を運営し、ブランクを感じさせない運営力を見せた。内容も濃いものであり、文化的な楽しみ方を体現する姿勢を見せ、本校の文化を継承しながら新しい流れも作り出せた。

・学校評価アンケートでは「部活動や学校行事が盛んにおこなわれている」という質問に対し、肯定的意見が 88%～90%となっており、一昨年度からの肯定的意見の増加傾向が続いている。
（評価 A）

・学校説明会において生徒会や福祉科の生徒が説明を行うなど、生徒が前面に出る活動が増えた。今後さらに生徒の自発的な活動を増やすと同時に、他の生徒に見える化を図っていきたい。
（評価 B）

〇体罰 0 件

⑤健康づくり

＜目標と方策＞

〇学校保健計画に基づき、生徒の健康の保持増進を図り、安全確保を徹底する。特に感染症対策には生徒の自主的な活動を取り入れ、生徒が当事者意識を持ち、自ら課題を解決していく態度を養う。

〇環境美化を重視し、美化委員会を中心とした生徒の自発的な清掃活動を推進する。学習環境の整備や保全に心がけ、美化活動を通して生徒の豊かな心を涵養する。

〇生命尊重の視点に立ち、「ＳＯＳの出し方」や、不登校や自殺等対策に資する教育の推進として、積極的なスクールカウンセラーの活用を行い、教育相談体制の活性化を図る。教育相談委員会を定例的に実施し内容の充実を図る。

〇教育相談委員会を中心に、「都立学校発達障害教育推進エリアネットワーク」を積極的に活用し、特別支援教育や日本語支援を必要とする生徒へのきめ細かな対応に心がけ、学校全体で特別支援教育の推進に取組む。

〇体育の授業において運動量を確保するとともに、スポーツテストの結果をフィードバックし、エビデンスベースの最適化された学びを提供することにより、基礎体力の向上を図る。また、部活

動を通してバランスのよい体力づくりを取り入れる。

＜取組みと自己評価＞

○美化委員会を中心に環境美化に努め、分別を徹底すると同時に、生徒主体の活動を推進した。来年度に向けてさらにその活動を見える化し、生徒が自治の意識を持てるようつなげていく。
（評価 B）

○生徒に寄り添う指導と観察を徹底し、教育相談員会の活性化が見られた。外部専門家によるケーススタディー会議を２度行い、産婦人科医による講演で命の大切さをテーマにするなど、保健部、養護教諭や SC を中心に生徒の支援を行えた。
個別の指導計画が作成しきれていないところがあった。

・学校評価アンケートでは、「先生は自分たちの意見や悩みに適切に応じてくれている」という設問に対し、肯定的回答が 85~91％台であった。特に、福祉科や体育科の「よくあてはまる」が 30％台からそれぞれ 40％、49％に増加した。保護者の回答では、「よくわからない」「ややそう思う」が減少し、「良くあてはまる」が 26％増であった。教員の自己評価は肯定的意見が 89％であったが、「良くあてはまる」に生徒の認識との隔たり（教員の回答が高い）がある。**（評価 B）**

○体育の授業では、昨年度に比べ、年間計画の変更は少なく済み、持久走やマラソン大会が実施できた。普通科・福祉科の水泳が未実施であった。生徒の運動能力の向上が次年度のスポーツテストの結果にみられることを期待している。**（評価 B）**

⑥募集・広報活動

＜目標と方策＞

○ホームページの充実を図り、即時性のある発信力を高める。また、生徒が主役となる発信方法を構築し、地域の方々や中学生、その保護者に本校の日常の教育活動を効果的に発信する。

○学校見学会・学校説明会・体験入学等を積極的に開催して、本校の特色及び各学科の特徴を中学生とその保護者に丁寧に説明し、アドミッション・ポリシーに基づいた生徒の募集を目指す。

○出前授業や模擬授業等、校外の募集活動に積極的に参加するとともに、部活動体験の回数を増加することにより、特に近隣中学校との連携・交流をより一層推進していく。

○生徒による母校訪問や、全教職員体制による中学校訪問、体育科の専攻スポーツ体験入部（説明等）を積極的に実施する。

＜取組みと自己評価＞

○ホームページの更新は昨年度とほぼ同数の更新を行った。また、刷新を機に、古いコンテンツを削除し、新たな取組も始めることができた。動画の配信など、不十分な個所もあるので、更に情報発信の重要コンテンツとして活用を推し進めていかねばならない。

・生徒会発信の SNS を開始し、トピックスや図書館情報など生徒主体の情報発信を目指した。まだ、生徒主体の情報発信という面では運用を含めて試行錯誤の段階であり、今後さらに生徒目線での発信を充実させていく必要がある。**（評価 B）**

○感染症対策もあったが、母校訪問を実施し、部活動体験も何件か行うことができた。学校見学会、学校説明会への中学生の参加人数は昨年度比 120％であり、一昨年度の数値も上回った。学校見学会の回数を増やしたことが数字につながった。その結果、受験生に占める説明会参加率が上昇し、倍率は出なかったが、本校のことを理解して受検する生徒の増加につながった。**（評価 B）**

⑦学校経営・組織体制

＜目標と方策＞

○スクール・ミッション及びスクール・ポリシーの実現に向けて、企画調整会議と教科主任会を経営の基盤に据え、経営課題の解決と経営方針の徹底を図り組織的な対応力を高める。

○経営参画ガイドラインに基づき、経営企画室における業務執行の適正化を図り、透明性を担保した執務の励行を行う。

○内部評価及び外部評価の結果に照らして、改革や改善を常に意識することで、創意工夫のある教育環境を整える。
○ＰＴＡや同窓会と緊密に連携し、共催事業を実施することにより教育活動を充実させる。
○保有個人情報の管理を徹底することにより個人情報紛失事故を０とする。そのために、クリーンデスクに取り組み、机の施錠と使用する施設等の施錠を徹底する。
○会議の効率化、コミュニケーションの充実、新規導入されるシステムの効果的活用により、業務の改善を図り、教職員のライフワークバランスを図る。

＜取組みと自己評価＞

○教科主任会は昨年度以上に活性化し、観点別評価や新カリキュラムの選択科目などについて前進することができた。次年度は観点別評価の教科間の課題や取組の共有化と、幅広い情報収集などにより、更に活性化につなげていきたい。**（評価 B）**
○若手教員は、相互研鑽の意識が高く、競うように良い授業を行おうと向上心を持って業務にあたることができた。それが生徒の授業アンケートに対する好評価につながっていると考えられる。さらにオープンな授業の形態を目指す。**（評価 A）**
○経営企画室は組織的に運営されており、事故の発生０件、ヒヤリハットもほぼなかった状態である。恒常的に残業する職員はいないが、それぞれの繁忙期には遅くまで業務をする姿が日常的でもあり、業務の整理とバランスの確保をさらに進めていかねばならない**（評価 A）**
○ＰＴＡや同窓会との交流には工夫を持てず、特にＰＴＡとのアイデアの共有や新しい試みに欠けてしまった。しかしながら、行事への PTA 役員の参加、保護者の観覧、マラソン大会運営の補助などをお願いすることができ、次年度以降への足掛かりはできた。**（評価 C）**
○個人情報関連の事故は０であった。すべての事故防止がうまく機能しているというわけではなく、クリーンデスクを始め、結果でとらえるのではなく、日常の運営を評価していきたい。教員間のコミュニケーションは概ね図られており、その雰囲気を事故防止に活かしていく。**（評価B）**

（２）今年度の重点目標と方策　　**※囲み数字は昨年度を上回ったもの**

①基礎学力の定着と進路実現の推進

項目	目標数値	今年度の数値	前年度以前の数値
中途退学率	2.0%	3.5%	３年度 3.1%　２年度 2.5%　元年度 3.6%
進路決定率	普 95%以上 福 95%以上 体 95%以上 大学進学率 25%	普 86% 福 100% 体 95% 大学進学率 26%	３年度 84%　２年度 89% ３年度 94%　２年度 84% ３年度 90%　２年度 93% ３年度 25%　２年度 26%　元年度 16%
・高校での学習の仕方が理解できる（肯定的回答）各学年 85%以上		１年生 83% ２年生 83% ３年生 88%	３年度　１年生 82% ２年生 84% ３年生 83%
・授業や学習に積極的に取り組んでいる（肯定的回答）各学科 85%以上		普通科 86% 福祉科 92% 体育科 91%	３年度　普通科 82% 福祉科 78% 体育科 83%
・授業での説明や教え方は分かりやすいように工夫されている（肯定的回答）各学科 90%以上		普通科 91% 福祉科 87% 体育科 83%	３年度　普通科 86% 福祉科 79% 体育科 90%

②普通科・福祉科・体育科の個性化・特色化の推進

項目	目標数値	今年度の数値	前年度以前の数値
生徒の入学満足度	85%	普通科 83% 福祉科 80% 体育科 83% （保護者 80%）	3 年度一年生　普 84%　福 66%　体 79% 2 年度一年生　普 82%　福 95%　体 90% 元年度全体　69%
介護福祉士国家試験合格率	100%	100% 全員合格	3 年度 94%　2 年度 84%　元年度 88%
応募倍率	普　推薦1.50倍 一次1.10倍 福　推薦1.50倍 一次1.10倍 体　推薦1.50倍 前期1.10倍	普　推薦 1.48 倍 一次 0.72 倍 福　推薦 0.90 倍 一次 0.38 倍 体　推薦 2.00 倍 前期 0.75 倍	3 年度 1.30 倍　2 年度 1.65 倍　元年度 1.13 倍 3 年度 0.88 倍　2 年度 0.79 倍　元年度 1.05 倍 3 年度 1.20 倍　2 年度 2.90 倍　元年度 0.90 倍 3 年度 0.48 倍　2 年度 0.96 倍　元年度 0.27 倍 3 年度 1.25 倍　2 年度 2.00 倍　元年度 2.25 倍 3 年度 0.38 倍　2 年度 1.08 倍　元年度 1.17 倍
各種検定受検者数	のべ 40 名以上	37 名(英検 23 名　PC 関連 14 名) 他　ｽｷｰ検定、ｷｬﾝﾌﾟｲﾝｽﾄﾗｸﾀｰ、ｽｸｰﾊﾞﾀﾞｲﾊﾞｰ(体育科)等	
ＨＰ更新回数	200 回以上	276 回	3 年度 277 回　2 年度 248 回　元年度 212 回
部活動加入率	60%以上	59%	3 年度 59%　2 年度 58%　元年度 51%
部活動実績		陸上部　女子やり投げ　インターハイ、国体、U18 全日本出場 男子サッカー　全国高校サッカー東京都予選ベスト 64	

③基本的生活習慣の確立

項目	目標数値	今年度の数値	前年度以前の数値
いじめ対応件数	0 件	1 件	3 年度 0 件　2 年度 1 件
体罰、暴言等	0 件	0 件	3 年度 0 件　2 年度 0 件
皆勤生徒数	各学年 20 名	1 学年 18 名 2 学年 18 名 3 学年 25 名	3 年度　1 学年 25 名　2 学年 22 名　3 年生 11 名 2 年度　1 学年 20 名　2 学年 15 名　3 年生 19 名
年間遅刻延べ回数	4000 回	5235 回	3 年度 4288 回　2 年度 6315 回　元年度 6068 回
生徒は、クラスや部活動などで、良い交友関係をもっている（肯定的回答） 各学科　90%以上		普通科 88% 福祉科 90% 体育科 94% （教職員 93%） （保護者 77%）	3 年度　普通科 82% 福祉科 78% 体育科 92%

④その他

項目	目標数値	今年度の数値	前年度以前の数値
時間外勤務時間	平均 25 時間以内	32.3 時間	3 年度　30 時間
本校は、教職員のライフワークバランスに配慮した取組みが行われている　80%以上		78% (回答:教職員)	3 年度　68%(回答:教職員)